

主 題：旧約に見る神の救いのご計画 3

聖書箇所：創世記4：1-7 5：21-24

創世記4章をお開きください。

一月前、礼拝が終わり、ホールで4人の若い姉妹たちが席を取り食事をされていました。私より若い姉妹と言うと、70代も60代も全部そうですけれども、特に若い姉妹たちです。その時隣にたまたま座った姉妹が私に「出エジプト記に、モーセの律法に奴隷の耳をきりで刺し通す(21:6)と書いてありますが、これは一体どういう意味ですか」と質問されました。私も何回か読んだのですが、出エジプト記にそんなことが書いてあったかなと、全然記憶になくて、姉妹にはまことに申しわけなかったのですが、考えて返事をしました。何かその奴隷がこの家の奴隷だということを示すための印を耳にピアスのようにぶら下げた穴と違うかな、でも後で調べてもしも違ったら伝えるねと。

私はいつも聖書の中にはイエス・キリストの救い、イエス・キリストの型というのがあると思っていましたから、これはイエス・キリストの十字架の型かなとその時は思いました。きりで刺すということと十字架に架かれたイエス様がやりで刺し通されたこと、そして耳から血が出るというのはイエス様の十字架の血かなと。でも出エジプト記21:6を読むと全くそうではありませんでした。当時のイスラエルでは、律法のルールに奴隷は6年間その家の奴隷として働いたら自由になるというのがありました。だから6年たってもこの家の主人に仕えたいという思いを持った時に、奴隷は申し出て、その家の戸口に行って扉か柱に自分の耳を主人によってきりで刺してもらい、そのことによって私は一生この主人に仕えるということを表わすきりだったということがわかったのです。聖書の勝手読みをして、十字架かなと解釈したことを反省しましたが、同時にこの二十歳ちょっとの姉妹が出エジプト記を読んで、この箇所からこういった質問をされる、疑問を覚えられるということはすばらしいことだと思いました。私たちもそうですが、ともすれば旧約聖書を読むことがない。そういう時にこうやって旧約聖書を読んで疑問に覚えられ、学んで行かれるということであれしく思ったのです。ちなみに「耳」というのは従順を表わすそうですから、耳にきりで穴をあけて血を流す、そしてその扉や柱に耳をつけるということはこの主人に絶対的な服従を誓うということで、奴隷としてすばらしい行ないだったのです。

きょうは旧約における神の救いのご計画のパート3をお開きいただいた創世記4章からお話しさせていただきます。

《序論》

今までの救いのご計画の1、2にも記されていたことですが、ローマ1:2-3、ローマ15:4、ヨハネ14:6は、福音は神様が預言者たちを通して聖書において前から約束されていたものだということを教えるものだというわけです。福音というのは旧約の時代から語られていたと。そしてそれが御子、イエス・キリストに関することであるということをおたちは教えられています。聖書は、英語で言えば“The Book”、「本」という題ですから、旧約聖書や新約聖書と分けているわけではなく、一冊の本です。そしてその本の主題は救い主イエス・キリストです。ですから私たちは分け隔てなく聖書から学ぶ必要があるということをお伝えされているわけです。今まで既に多くの救いの予型を見ました。幕屋と聖所、司聖所、あるいは契約の箱とか祭司や大祭司のことを学んで来ました。そして前回はイエス・キリストが神の子キリストであり、罪を取り除く神の子羊である、すなわちご自身が十字架に架かって血を流され、私たちの罪のために贖いの、犠牲の子羊として神様に捧げられたお方であるということをお学びました。

きょうは創世記4章、5章を通して、なお神様が私たちにそのような救いのメッセージを送ってくださっていることをご一緒に学びたいと思います。

I 原始福音(創世記3:15、21)

罪を犯したアダムとエバに神は最初の福音を示されました。もちろん当時聖書がなかったわけですから、このすべての意味を彼らが理解していたというわけではありません。創世記3:1からお読みしますと、「1 さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。『あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。』 2 女は蛇に言った。『私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。』というやり取りが始まり、アダムとエバが神様が園の中央にある善悪の木の実から取って食べてはいけないと、この木の実を取って食べたら必ず死ぬと言われたルールを破ることを学んだのであります。

彼らの住んでいるところは最高の環境でした。エデン——「楽しい」という場所でした。しかもそこに、柵を設けられて庭のようなところで保護を受けて、神様に守られて生活をしていたのです。たった一つのルールは「善悪の、知識の木の実を取って食べてはいけません」でした。しかし彼らはそのようなすばらしい環境に置かれていたにもかかわらず、神様のルールを破って死ぬものとなったのです。

なぜここで蛇が出て来たのか——。皆さんは蛇が何者かすぐおわかりだと思います。創世記1章から読んで行くと、この蛇が何者か私たちには理解しがたいものでありますが、聖書によれば蛇は悪魔であり、サタンであると教えています。悪魔は蛇になってアダムとエバの前に現れたとは聖書に書いていません。蛇を通して悪魔が働いたとか、具体的には何も書いていないのですが、少なくとも悪魔は世の動物のうち一番狡猾な蛇を選んで人間の前に誘惑者として置かれました。恐らく彼は、鬼のような角を出して、黒いマントを着て目はこんなで牙があって、子どもでも想像するような悪魔の姿をしていたのではないと思います。恐らく人間が見ても非常に親しみやすい姿をして、人間の目線に合うように立っていたように想像することができます。そして蛇は巧妙に人間を誘惑したのを私たちは前回学びました。この木の実を取って食べても死なない、そんなことはありません。この木の実を取って食べたなら、あなたがたが神様のように賢くなるから、神様は恐れてあなたがたにこれを取って食べてはいけなと言われたのだと言うわけです。彼は決して「おまえたちこの木の実を食べろ」、「もしも食べなかったら私があなたがたを迫害するぞ」とは言いませんでした。巧妙なことばをもって彼らを誘惑したのです。アダムとエバはまんまと罪を犯した。なかんずくエバはサタンによって誘惑されましたけれども、アダムは誘惑されず、彼はわかっていて妻の勧めに乗ってこの木の実を取って食べてしまったということを私たちは聖書から学んできました。

そしてその木の実を取って食べた時、「:7 このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。:8 そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。」、善悪の知識の木の実を取って食べた彼らの目が開かれた。この木の実に善悪を知る力があつたのかどうか、私たちにはわかりません。いずれにしても彼らはこの木の実を取って食べた時、目が開けたのです。そしてアダムとエバはお互いに裸であることがわかった。彼らは造られて最初にお互いに会った時に恥ずかしいとは思わなかったのです。2 : 25にそのように記されています。今、目が開かれた時に彼らは裸であることを知って、いちじくの葉をつづり合わせて自分たちの腰のおおいを作ったのです。恥ずかしかったということがわかります。このような出来事があつたと聖書は教えています。

1. 蛇の子孫・女の子孫 (3 : 15)

さて、この出来事があつた後、神様は蛇に次のように言いました。3 : 14に「神である主は蛇に仰せられた。『おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりもろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならぬ。』とあります。どんな獣よりも一番のろわれたものとなる。そして一生腹ばいで歩く。先ほど立っていたのではないかと言いましたが、ここでのろいは地をほうものとされたということです。そこから考えられるわけで、聖書が立っていたと書いているわけではありません、念のため。この「ろわれる」ということばの意味は「敵意を置く」ということばと同じです。あなたに敵意を置くと言われた。そしてまた特におまえの子孫と女の子孫との間に敵意を置くと言われた。神様が言われました。「彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」ということでした。神様は蛇に対してのろいを置かれました。

神様は神の形に似せた人間を愛して、アダムとエバをエデンの園に置かれた。けれども彼らは神様の命令に従わず、エデンの園から追放されたのです。結果的にはそのような形になりますけれども、その状態を私たち考える時、神様が最初罪を犯したアダムとエバに出会う状況を考えてこうでした。3 : 8、神様が来られた時に、主の声を聞いた彼らは「主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。」、そこで神様が言われたことは、「あなたは、どこにいるのか。」です。神様は全知全能の方ですから、アダムとエバがどこにいるのか知らなかったわけではない。どこにいるのか知っておられてなおかつ「あなたは、どこにいるのか。」と聞かれた。それはアダムとエバにチャンスを与えられたのですが、アダムの答えはこうでした。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」アダムが神に最初に答えたことばは、「私は裸なので、恐れて、隠れました。」でした。善悪の知識の木の実を取って食べた時、彼らは裸で恥ずかしいということがわかって腰を隠し、もう一つ、神様との関係においても身を隠した。もう顔を合わせるができなかったのです。そんな神様に声を掛けられた時、彼らはあなたを恐れて隠れたのだと言ったのです。

神様がアダムに期待した答えは何だったのでしょうか——。彼は一番最初に「私はあなたが取って食べてはいけないと言う木の実を取って食べた。まことに申しわけありませんでした。どうぞ私の罪を赦してください。」と言うべきでした。でもそうではありませんでした。ルール違反をしたアダムが取った

行動は神から隠れる、神様の顔をまともに見られない、そういう状況になったのです。蛇の作戦は見事に成功し、神様と人間との間に分離をさせたということを見ることが出来ます。

神様はこのような出来事があった時に、蛇に「一生、腹ばいで歩き、ちりを食べる、そして「おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。」と言われました。さて、私たちはこのことばを見る時に、先ほども言いました蛇とは一体何者かということです。この「蛇」というのはヘブル語に定冠詞がついていて、私たちが日常見るただの蛇ではないということを明らかにしています。いわゆるザ・蛇、その蛇です。これは黙示録12章にその答えが書いてあります。黙示録12章では蛇のいろいろな形が表わされています。赤い竜や大きな竜。特に9節では「悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇」とあり、すなわちこの創世記の時代に人間を誘惑したあの古い蛇が悪魔とかサタンとか言われているものであることを私たちははっきりと確信を持って知ることが出来ます。「悪魔」、ギリシャ語ではディアボロスということばが使われています。これは「批判する」あるいは「中傷する」、「悪口を言う」。新約はギリシャ語で書かれていますから、新約のみに出て来ます。悪魔はマタイ4章やルカ4章で新約聖書に最初に登場します。その時に悪魔はイエスを誘惑するものとして出て来ます。マタイでは試みられたイエスが10節で「引き下がれ、サタン。」と言われます。この「サタン」の項目を見ると、ヘブル語でシャタン、「敵対するもの」と書いてあります。神様は女の子孫と悪魔との間に「敵意を置く。」と言いましたが、このようにはっきりと敵対するものとして聖書は教えています。黙示録20章では、「悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれ」という、その終わりの様子が記されているのであります。ヨハネ8:44では、悪魔は「偽りの父」、「初めからの人殺し」であると記されています。

さて、この蛇の子孫、女の子孫ですが、創世記を見ると、「敵意を置く。」の後に女の子孫「彼は」と書いてあります。この「子孫」ということばは、もともとは「種」という意味のことばで、単数の男性名詞が使われていますので、ここでは「彼は」と言われています。「おまえの子孫」と言っておきながら、神様はここで「おまえ」と言っていますから、これは悪魔のことだということがわかります。単数形の「女の子孫」、特定の「彼」と悪魔である「おまえ」との関係において、この「彼」は「おまえ(サタン)の頭を踏み砕く、いのちを奪う」ということです。そして「おまえ」は「彼」のかかどに噛みつく——彼に苦しみを与える、そういう関係に置くということをご自分で宣言されたのです。

◎ 女の子孫の勝利とサタンの敗北

紀元前742年に招命されたイザヤは、イザヤ7:14で「処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」と預言しています。この「処女」というのは定冠詞がついているので、単なる処女ではなく、ある特定の処女を表わしています。この特定のおとめが男の子をみごもって、「インマヌエル」と名づけられると。一体それはだれかということ、新約聖書になって答えが記されています。マタイ1:21-23にその出来事が記されています。「マリヤは男の子を産みます。……その名はインマヌエルと呼ばれる。」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)と書かれていますけれども、この特定の処女がマリヤであり、そしてその男の子がインマヌエルだという答えをマタイの福音書は私たちに与えてくれます。

そして、ガラテヤ4:4では、「定めの時が来たので、神はご自分の御子を……女から生まれた者」としてくださったと。何千年も前に預言をされた、そして紀元前740年代にイザヤ書において預言された一人の男の子が紀元の初めにイエス・キリストとしてお生まれになるということがここで実現された。これが神様の定められた時であります。

そして、ローマ16:20では、「平和の神は、……サタンを踏み砕いてくださいます。」と、神様がこのサタンを踏み砕くと言われています。「彼は、おまえの頭を踏み砕き」と、創世記で神様が言われたとおり、そのようになると。

ヘブル2:14-15では、主は「悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼす」と記されています。これがこの預言の成就した形を私たちに教えています。このようにして、悪魔と女の子孫との関係が預言され、そして多くの時を経て実現したのであります。イエス・キリストはお生まれになりました。

2. 皮の衣(3:21)

さて、もう一つ創世記3:21「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」と。罪を犯したアダムとエバに皮の衣を作って着せてくださったという神様のすばらしい恵みが記されています。最初に罪を犯した時にアダムとエバはいちじくの葉をつづり合せて自分たちの腰のおおいを作ったと書いてあります。(創3:7)自分たちで園にはえていたいちぢくの葉っぱを集めて来て、それをつづり合せて腰の覆いを作ったと。彼らは目を開かれた時に、恥ずかしいとわかったわけです。罪の結果がそういうことでした。だから、自分たちで何とかしようと羞恥心を隠そうとして努力したのが葉っぱをつづり合せて腰のおおいを作ることでした。腰のおおいというのは腰の部分だけを隠す一時的な隠れ蓑です。彼らは自分たちで何とかしよう、自分たちの犯した罪を何とかして隠そうと努力したのです。これは自己義認ということばで表わすことができます。自分たちはそれでよかったかもしれませんが、神様の目から見た時十分ではありませんでした。神様は、「皮の衣を作」と記されていますから、神様はそのような一時しのぎ、人間が自分で作るようなものではなくて、神様ご自身が最善のものとして備えられたものを彼らに与えられたのです。それは罪がない動物が流す血の代価によって作られた皮の衣であります。私たちは神の子羊であるイエス・キリストが十字架で流してくださった血によって罪

を赦される、罪が贖われる、罪が取り除かれることを学びましたが、神様はここでその原型をアダムとエバに示されたのです。

イザヤ61:10には「主がわたしに、救いの衣を着せ」と記されています。神様が救いの衣を着せられるのであって、人間が自分で作って自分で満足して、これでよいとして着るものではないと教えています。ガラテヤ3:27にも「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。」と記されています。ローマ13:14では「イエス・キリストを着なさい。」と命令されています。これが新約聖書の答えです。

さて、このように罪を犯して、けもの皮で作った衣を着せてもらった彼らは、エデンの園から追放されます。このままエデンの園に置いては、永遠のいのちの木の実を取って食べるおそれがあるからと言って、神様はエデンの園から追放されたのです。なぜなら彼らは罪を犯した。死は分離であるということを前回お話ししました。神様との関係において分離する、肉体と魂の関係において分離するという関係だということを申し上げたのですが、永遠のいのちの木の実を取って食べないようにエデンの園から追放された、3:23-24に記されています。

II. カインとアベル(4:1-7)

そしてそのような出来事があった後、4:1から「人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、『私は、主によってひとりの男子を得た。』と言った。」、アダムとエバの間にひとりの男の子が生まれました。彼女は『私は、主によってひとりの男子を得た。』と言います。彼女は神様が言われた「女の子孫」に違いないと思ったのです。今神様によって私は男の子を与えられた、名前を得た、取得した、それでカイン——「得た」という名前を付けたのです。そして続いて弟のアベルを生んだ。アベルというのは「息」という意味です。人が造られた時に神様が鼻から命の息を吹き込んだ。そのことばを私たちは思い浮かべますが、神様によって約束の男の子を得た、続いて神様との関係が回復される。その「死」について、これで大丈夫だと思ったに違いないのですが、彼女はアベルという名前をつけました。カインは土を耕す者となり、アベルは羊を飼う者となったと記されています。

1. カインとアベルは神に捧げ物をした。(4:3-4)

そして、ある時期になって、カインは神様のところに捧げ物を持って来ました。地の作物からの捧げ物でした。またアベルも同じように神様のところに捧げ物を持って来るのですが、それは羊の初子の、その中から最良のものを自分自身で持って来た、と聖書は記しています。神様がカインとアベルに捧げ物をしなさいと命じたわけではないことは明らかです。ある時期になって彼らは自発的に捧げ物を持って来ました。カインもアベルも同様です。カインが神様に捧げるために持って来た物は、自分が耕して作った土地の農作物でした。アベルは自分が飼っていた羊の中から最初に生まれた子ども、たくさんいる中から一番よい赤ちゃんを選んで自分自身で抱えて持って来た。多分カインも自分自身で持って来たと思うのですが、特にアベルが持って来た行為に対して神様は目をとめられたのです。

2. 神はアベルの捧げ物だけを受け入れられた。

神様はカインの持って来た捧げ物には目をとめられなかった。アベルの捧げ物にだけ目をとめられた。どうしてなのか——。私たちもわかりませんが、特に当時カインはわからなかったと思います。なぜアベルだけが用いられるのだということです。神様の受け入れられた理由は、まず神は人をごらんになった。また捧げ物をごらんになった。信仰をごらんになった。そして、心をごらんになった。

① 人をごらんになった

人をごらんになった。カインの行ないは悪かったのだと言うわけです。なぜそのことがわかるのかというと、Iヨハネ3:12に、「カインのようであってはいけません。彼は悪い者から出た者で、……自分の行ないは悪く、兄弟の行ないは正しかったからです。」と記されているからです。カインとアベルの行ないを比べて彼の行ないは悪かった、アベルの行ないは正しかった。そして、「悪魔の子ども」であったとIヨハネ3:10には記されています。なんとエバが「女の子孫」を得たと思ったにもかかわらずIヨハネでは「悪魔の子ども」と言われている。カインはそのようなものであったということがわかるわけです。人をごらんになった時に、明らかにカインとアベルには違いがあったということを聖書は教えているのであります。

② 捧げ物をごらんになった(4:4)

次に捧げ物をごらんになった時に、カインの捧げ物がなぜ悪かったのか——。一生懸命働いて持ってきた農作物がどうして悪いのかと、カインならずとも思うわけですが、答えは少し逆のぼったところ、その土地が呪われているということを私たちは見ることができます。3:17「アダムに仰せられた。『あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。』」と書いてあります。カインはこののろわれている土地からできた作物を持って来たのです。神様の前にそれがよしとされるものかどうかを考えなかった。ところが、アベルはそのことについて考えていたようです。とにかくカインはこれでよかろうと、自己満足をしたということです。アベルはその最良の捧げ物を持って来ることによって、神様の前に出るためにはこの最良の子羊がそこで捧げられて血を流す必要があることを知っていた。なぜならば、アダムとエバも知っていて、彼らのために皮の衣を作って着せてくださった神様のことをカインとアベルに話をしたでしょう。アベルはそのことを心にとめていたのです。カインはとめていなかった。もし彼がそのことをよく理解していたら、「アベル、

悪いけどおまえの羊を私に貸してくれないか、それを神様に捧げたい」と言うことができたはずですが、彼はそうしませんでした。ここでもアダムとエバがいちぢくの葉で腰をおおったように、自分で考えた、これが最良のものであろうと思って持って来た物が実は最良のものでなく、のろわれた土地からの作物であった。しかも血を流すことが必要であったことを考えれば、神様の前に血を流さないで出ることができないことを知るべきであったのに、彼は無知だったということです。アベルは神様の要求に見事に答えて、最良の子羊を持って来たということを見ることができるのです。

③ 信仰をごらんになった(ヘブル11:4、6)

信仰をごらんになった神様は、ヘブル11:4、6で「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを」捧げたと書いてあります。ただ物で判断しただけではなくて、神様は信仰によってカインとアベルを判断したと教えられます。確かにカインは自発的に自分で考えて捧げ物を持って来ましたけれども、それは信仰によるものではなかった。単なる知識として神様に捧げ物をすればいいと。現代の人間的な世界での一般的な考え方です。そうではなくて、神様が決められたルールがあることをアベルはよく考えたのです。そしてアベルは神に受け入れられたいと望んで、この捧げ物が神に受け入れられるに違いないと確信をして受け入れられたのです。これが信仰の定義でした。ルカ11:50-51に「それは、アベルの血から、祭壇と神の家との間で殺されたザカリヤの血に至るまでの、世の初めから流されたすべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。」と記されています。「アベルの血から」と書いてあります。「すべての預言者の血の責任」と書いてあります。旧約聖書ではそんなことは言っていませんが、実はアベルは、私たちに神様の救いのご計画を伝える預言者だったのです。だから彼は罪が赦されるためには、ここでは動物の血が流されなければならない、そして最終的には「女の子孫」の血が流されなければならないということを預言したのであります。

④ 心をごらんになった。(Iサムエル16:7)

神様は心をごらんになります。「人はうわべを見るが、主は心を見る。」とIサムエル16:7に記されているとおりです。このようにして、残念ながらカインは最初の殺人者、アベルは最初の殉教者にして預言者となったということ私たちが知ることができるのです。

III エノク(5:21-24)

さて続いて5章を見るとエノクのことが記されています。5:1からアダムの歴史が記されています。そしてアダムから始まって7代目がエノクになります。それまではだれだれは全部で何年生きて、何年で死んだと書いてあります。ところが7代目のエノクのところ、21節を見ると、「:21 エノクは六十五年生きて、メシェラを生んだ。:22 エノクはメシェラを生んで後、三百年、神とともに歩んだ。そして、息子、娘たちを生んだ。:23 エノクの一生は三百六十五年であった。」ほかの人たちとの違いは死んだということばがないことです。「神が彼を取られたので、彼はいなくなりました。」で終わりなのです。65年生きて最初の男の子を生んで、あと300年生きて365年が彼の一生でした。65年間は彼はどのように歩んだかは記されていないのですが、65歳から後の300年間は「神とともに歩んだ。」と聖書は記しています。この300年間はエノクは本当に神様とともに歩む人生を送ったことを私たちは見ることができます。エノクという名前の意味は「捧げる、そなえる」という意味でした。

◎ 神に喜ばれる歩みとは

神とともに歩む人生とはいかなる人生か——。前回近藤牧師の学びにもありましたが、ミカ6:8にその答えが記されています。「主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。」

① 公義を行なう

まず「公義を行なう」ことだ。「公義」とは「公平」といった意味があります。公衆が、だれもが是とする、正しいとすることを行なうことだ。すなわち聖書的に見れば、律法になかった正しい行ないであると。物事の判断基準は私の考えではなくて、神の正しさをもって決定する。

② 誠実を愛する

そして誠実を愛する。誠実のことばの意味は「まごごろ、まこと」です。神様に対して愛に忠実な、そして神様に対して偽りが無い、そのような人生を歩むことであると。

③ へりくだって神とともに歩む

「へりくだって」、自分にいかに欠けたところが多いかを知って、そして高慢に振る舞うことがないということです。神が人に求められることは神を愛し、神に従い、そして人を正しく愛すること。エノクはこのようにその人生最後の300年の歩みを終えたので取られて天に上げられたのです。

IV. 新約聖書の説き明かし(ヘブル人への手紙)

さて、これらの出来事は一体何を教えているのか——。

1. アベル(11:4)

アベルについてヘブル11:4で「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。」と書いてあります。ここで先ほど申し上げたように答えは明らかです。

信仰によってカインよりも優れたいけにえを捧げ、そのいけにえによって義人であることの証明を得た。神様の前に出るには罪人のままではだめだ。血が流されなければならない。その必要がある。そのことを彼は告白したのです。その「ささげ物を良いささげ物だと(神様が)あかししてくださいましたからです。」とあります。

ヘブル9:22では、「それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」と教えています。今私たちは新約聖書を手にしてはっきりとそのことを知ることができると言うのです。同じくヘブル9:11-12でもイエス・キリストがそのようなお方であるということを教えています。

2. エノク(11:5)

ヘブル11:5を見ると、「信仰によって、エノクは死を見ることなく天に上げられました。」とあります。詳訳聖書ではこの「移されました」を「天に上げられました」と書かれています。「神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。」、このような人生は神様に喜ばれていたと言っているわけです。マタイ22:36-40には、律法学者たちがイエス様を試そうとして、陥れようとして何が一番大切な戒めなのかと質問をします。その時、イエス様は「心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くして、主なるあなたの神を愛せよ。そして自分自身を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい。」と答えられたことを私たちはよく知っていますが、まさにエノクの人生は神を愛し、そして人を愛する人生であったと見るすることができます。

3. 来たるべき時代の型

① 人の罪が赦されるためには、血が流されなければならない。(コロサイ1:19、20)

② 救われた人たちは正しい信仰生活を送らねばならない。(ヤコブ2:14、17)

③ やがて神は救われた者たちを迎えるために、イエス・キリストを遣わされる。その時地上で生きているクリスチャンたちは、艱難時代の前にエノクのように死を見ることなく空中に引き上げられ主とお会いする。

私たちは、カインとアベル、そしてエノクの3人の人生を見て来たわけですが、この箇所が来たるべき時代の型だからです。旧約の時代にも救いの計画が記されていた。私たちは今新約聖書があるから、神様の救いの計画、福音とは何か、救い主はどなたかということをよく知っていますが、旧約の時代には預言者はいましたが、聖書がなかったのです。ましてアダムとエバ、カインとアベル、エノクの時代にはそのようなことはなかったのです。ちょうど私たちが今双眼鏡を逆さまにして見ると、遠くの物がより小さく映る。そのように創世記3:15、21で神様が語られ、またしてくださったことを通して神様の救いの計画がここにあるということを見ることができるのです。

そして、このエノクの後の登場人物はノアです。ノアの時代のことを皆さんはよく知っておられると思いますが、ノアの時代にはすべての人間が心に思うことは悪だったというわけです。だから神様はノアの家族を除いてすべての人類を滅ぼそうと決心された。そのような悪い時代です。人類にとって大きな艱難が来る前の時だったのです。エノクはこのような全人類を滅ぼす時代から、死ぬことなく生きたまま天に上げられたひな形であります。翻って私たちは、艱難時代の前にイエス・キリストが空中に来られて、私たちを迎えてくださることを知っているのです。

来たるべき時代の型の3番目、Iテサロニケ4:16-17を見ると、「:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、:17次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。」、これが私たちの望みです。イエス様とお会いする。先に召された兄弟姉妹たちはよみがえらされて、その時私たちが生きていればですが、その後、私たち地上にいるクリスチャンたちは一挙に天に生きたまま引き上げられる。エノクはその型です。艱難に遭わないように生きたまま天に上げられる、そのことを私たちは創世記の出来事を通して見ることができるわけです。遠くから、こんなにすばらしい前から、神様の救いのご計画は天地の基の置かれる前からそのように定められていると聖書は言っていますけれども、まさにそのとおりでした。カインは気がつきませんでした。アベルはそのことが理解できたのです。彼は新約聖書で預言者と言われています。今私たちは聖書によって私たちが罪人で、あのアダムの子孫であるということは明らかです。すべての人は罪を犯したために神の栄光を受けられなくなっている。その立場にあることを知っています。

イエス・キリストを信じなければ、私たちは救われることはなく、救い主イエス・キリストはそのことをよく知っているのです。人は心に信じて義とされ、口で告白して救われると聖書に書いてあります。神様はうわべだけではなくて人の心をごらんになると聖書は教えています。残念ながら、私たちはこの世界に人間が自分で考えたいろいろな宗教があることをよく知っています。あのアダムのように、カインのように、自分がこれでよいと思って、神様のためにすることであっても、神様の目からごらんになった時、それは間違っているということがたくさんあるということを知ることができるのです。自己義認の方法は神様に受け入れられません。先ほど読んだアダムの子孫にカインの名前は出て来ません。カインの子孫も出て来ません。彼は悪魔の子どもとして、悪魔の子孫として聖書に名前が記された残念な存在になってしまったわけです。私たちは神様の恵みによって救いの中に入れられた。神様が皮の衣を備えてくださった。同様にご自身が愛するひとり子をこの世に送ってその方の血を流してくださり、

イエス・キリストを信じる者に救いを与えてくださった。これが恵みでなくして一体何かということです。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。」とエペソ2:8に書いてあります。恵みなのです。救われたことを心から感謝したいと思います。こんな昔から、世界が造られる前から計画されたことがこのようにして現実になって、人が造られたその時に明らかにされて行っているということです。

もしまだイエス様を信じておられない方がおられたとしたら、神様の救いはたった一つしかありません。イエス・キリストを通しての救いです。どうかイエス・キリストをあなたの救い主としてお信じになるように心からお勧めしたいと思います。

《結論》

今、私たちは旧約における神の救いのご計画を知ることができました。なんとすばらしい神の恵みでしょうか。創世記3:15に灯された小さな福音の光が神の偉大な救いのご計画によって私たちを照らし、旧約時代の人々がどのようにして救われたのかを教えます。私たちが救われたのは、ただただ神の恵みによります。私たちが救われるべきいかなる理由もそこにはありません。

1. 私たちが救われたことを感謝しましょう。
2. いまだ救われていない方々のために祈りましょう。
3. いまだ救われていない方々のために、私たちに何ができるかを考え実行しましょう。
4. 語らずとも、私たちの日常の証を通して、神を信じる者のあり方を知っていただきましょう。
5. まだ信仰をお持ちでない皆さん、神はいつでもあなたがアベルのように、エノクのようにになりたいと思われるのを待っておられます。その時はあなたのそばのクリスチャンの方にその思いをお知らせください。